

病理科カリキュラム

I. 目的と特徴

病理医とは？

1) 生検や手術で採取された組織を固定・包埋し、5ミクロンの切片を作って、「*Helicobacter pylori*の感染があるか？」、「良性腫瘍か悪性腫瘍か？」、「がんがどこまで広がっているか？」などを顕微鏡で診断します。悪性リンパ腫、GIST、乳癌などでは、腫瘍の免疫組織化学の結果が治療法の選択に直結しています。細胞検査士とともに細胞診を行い、細胞レベルの所見をもとに病変の有無や病変の内容を判定します。

2) 術中に凍結切片による迅速診断をします。結果はすぐに手術に反映されます。

3) 病理解剖を行って、病気の原因や死因，治療効果や副作用，臨床的には診断し得なかった病変を明らかにします。

病理医の地道な努力が病院の診療レベルを支えています。徳島大学病院病理部では医学部病理学分野の協力のもとに専門性の高い診断業務を行っており、豊富な症例の病理診断の流れを理解することができます。

II. 研修責任者

病理部：坂東 良美 准教授（病理専門医、細胞診専門医）

人体病理：坂下 直実 教授（病理専門医）

環境病理：泉 啓介 教授（病理専門医）

III. 運営指導体制および指導医数

病理専門医：7名、細胞診専門医：3名

IV. 臨床実績

大学病院病理部では2009年1月から12月までに、組織診6777件、細胞診8324件、剖検37例、CPC37回を行っています。

V. 研修目標

一般目標：

- 1) 卒前教育において習得した各種疾患の病理所見、ならびに病理学と関連する臨床的事項についての基本的知識をさらに発展させる。
- 2) 病態を正確に認識し、かつこれを表現する能力を養い、代表的な症例についての的確な病理診断を下しうるようになる。

行動目標：

生検・外科切除検体の病理診断

- 1) 組織診断に必要な検体の取り扱い（固定・感染対策）を説明できる。
- 2) 標本作製を実施し、その過程を説明できる。
- 3) 代表的な症例について組織診断を正確に行い、報告書を作成することができる。

迅速診断

- 1) 適切な迅速標本の提出方法を説明できる。
- 2) 術中迅速凍結標本診断に不適切な検体を列挙できる。
- 3) 術中迅速診断のリスクについて説明できる。

細胞診

- 1) 塗抹標本の作製法、固定方法を説明でき、かつ実施することができる。
- 2) 各種検体（婦人科、喀痰、気管支洗浄、擦過、胸水、腹水、穿刺吸引など）の細胞診標本の代表的な異常（異型細胞、炎症、病原体など）を指摘できる。

その他

- 1) 特殊染色の目的、適用を説明できる。
- 2) 免疫組織化学の原理、操作法、診断に有用な抗体（マーカー）について説明できる。
- 3) PCRやISH (in situ hybridization) などの分子病理学検査法の病理診断における有効症例について説明できる。

剖検

- 1) 剖検の意義を認識し、遺体に対して礼を失することなく丁寧に扱うことができる。
- 2) 肉眼所見を正しく把握・整理し、剖検時に的確な病理解剖学的診断を下すことができる。
- 3) 組織標本作製のための切り出しが的確にできる。
- 4) 臨床経過、検査データ、生前の組織診断、細胞診断を参照し、肉眼所見、組織所見を総合的に判断し、正しい剖検診断を作成して依頼医に報告することができる。

VI. 研修内容

病理部および病理学分野の病理専門医による指導のもとで、生検・外科切除検体の病理診断、迅速診断、細胞診、剖検などに携わりながら研修を行います。診断レポートの作成、基本的手技の実施、カンファレンスへの参加などもあわせて行います。研修期間中における学会、研究会、勉強会にも積極的に参加していただきます。

VII. 研修スケジュール

水曜日の午後には CPC を行っています。随時、勉強会や臨床各科との検討会を行っています。

VIII. 評価法

研修責任者と指導医が総合的に評価し、研修終了時にフィードバックをします。最終的評価はオンライン臨床研修評価システム（EPOC）を用いて行います。